

2020年度
体育史学会 第9回大会
プログラム・発表抄録集

オンライン開催

2020年8月 29 日(土)

体育史学会について

「学会名鑑（日本学術会議・公益財団法人 日本学術協力財団・国立研究開発法人 科学技術振興機構が連携して作成しているデータベース）」に掲載の情報をもとに作成しました。

(2020年4月3日現在)

和文名

体育史学会

欧文名

Japan Society of the History of Physical Education and Sport (Taiikushi Gakkai)

ウェブサイト

<https://taiikushi.org/>

日本学術会議に登録している関連学術研究領域

史学、哲学、心理学、教育学、社会学、健康・生活科学

設立趣旨

多様化の容認と相互理解の促進をめざす現代社会において、体育・スポーツはこれ自体が変化するとともに、社会の変化にも避けがたい影響を与えている。このような状況の中、体育・スポーツと社会の将来を展望するために必要となる歴史的知見の蓄積が、社会的に要請されている。体育史学会はこの要請に応えるべく、体育史研究者による研究上の緊密な連携によって体育・スポーツ史に関する研究の発展を図ることを目的に設立された。

沿革

1961年 日本体育学会体育史専門分科会（前身）設立

2011年 体育史学会 設立（設立年月日：2011年9月25日）

2015年 日本学術会議 協力学術団体に登録

2016年 日本スポーツ体育健康科学学術連合 加盟学術団体に登録

役員

会長 1人、理事 6人、監事 2人（男性 6人、女性 3人）

会員数

正会員 230人、学生会員 5人、講読会員 5人、名誉会員 17人

刊行物

『体育史研究』

欧文名：Japan Journal of the History of Physical Education and Sport (Taiikushi Kenkyu)

創刊年：1984年 最新号：37号（2020年3月発行）

発行部数：250（部／回）

URL：<https://taiikushi.org/db/>

他の学術団体との関係

日本体育学会 専門領域体育史

日本学術会議 協力学術研究団体

日本スポーツ体育健康科学学術連合 加盟学術団

2020年度 体育史学会 第9回大会 開催要項

1. 日程

1日目：8月29日（土）12:00～17:00
一般研究発表、総会

2. 会場・会場責任者

オンライン開催・事務局

3. 参加費

無料

4. 一般研究発表時間

発表 20分、質疑応答 10分（計 30分）

5. 情報交換会

感染症拡大防止のため、開催しない

体育史学会第9回大会（2020年）プログラム

8月29日（土） 12:00 開会

開始時刻	発表者	演題	座長
12:00 ～12:30	新井 博 (日本福祉大学)	昭和5-11年のスキー普及と鉄道の関係について —名古屋管区内の長野と福井の場合—	坂上 康博 (一橋大学)
		5分休憩	
12:35 ～13:05	後藤 光将 (明治大学)	近代テニスにおけるサーブ技術の変遷史	坂上 康博 (一橋大学)
		5分休憩	
13:10 ～13:40	小谷 究 (流通経済大学)	1936年の日本におけるバスケットボール競技の ドリブル技術に関する史的研究	來田 享子 (中京大学)
		5分休憩	
13:45 ～14:15	尾川 翔大 (日本体育大学)	練習する選手たち —1920～30年代における東京六大学野球について—	來田 享子 (中京大学)
		5分休憩	
14:20 ～14:50	木下 秀明 (元日本大学)	「体操教範」内容の推移	新井 博 (日本福祉大学)
		5分休憩	
14:55 ～15:25	岩佐 直樹 (朝日大学) 來田 享子 (中京大学)	日本レクリエーション協会「レクリエーション 指導者資格検定規程」制定の経緯	新井 博 (日本福祉大学)
		5分休憩	
15:30 ～16:00	石立 克己 (北海道大学大学 院教育学院)	「奥寺龍溪の思想と少年団にみる『国際主義』」	田原 淳子 (国士舘大学)
		5分休憩	
16:05 ～17:00		総会	

◆**体育史学会のこれまでの学会大会と研究方法セミナーの軌跡**◆

第1回大会（2012年5月12-13日、福山平成大学）

楠戸 一彦（広島大学）

- 歴史研究の課題：実証と解釈

第2回大会（2013年5月11-12日、明治大学和泉キャンパス）

阿部 生雄（筑波大学名誉教授）

- スポーツ史におけるイデオロギーと無意識：概念史、人物史、制度史

第3回大会（2014年5月10-11日、神戸大学発達科学部）

山本徳郎（奈良女子大学名誉教授）

- 初期トゥルネン史研究で考えたこと

第4回大会（2015年5月16-17日、ホルトホール大分）

木下秀明（体育史学会会員）

- 私の陸軍戸山学校史研究：これ迄とこれから

第5回大会（2016年5月14-15日、一橋大学）

寶學淳郎（金沢大学）

- 私の東ドイツスポーツ史研究

第6回大会（2017年5月13-14日、龍谷大学）

佐々木浩雄（龍谷大学）

- 研究テーマの一貫性と俯瞰的視野：「体育・スポーツと国民統合」というテーマから

第7回大会（2018年5月12-13日、中京大学）

村戸弥生（石川工業高等専門学校）

- 蹴鞠口伝書読解方法について：

江戸初期蹴鞠書『中撰実又記』研究から地下外郎派蹴鞠復元へ向けて

第8回大会（2019年5月11-12日、大学サテライトプラザ彦根）

鈴木明哲（東京学芸大学）

- 体育・スポーツ史研究の叙述 —— 投稿論文を創る ——

昭和 5-11 年のスキー普及と鉄道の関係について

—名古屋管区内の長野と福井の場合—

新井 博

はじめに

昭和 13 年に大衆のためのスキー技術（『一般スキー術要項』）が定められ、昭和 14 年からその徹底を図るための講習とバッチ・テストが全国一斉に実施された。戦争で中段したが、昭和 25 年から「基礎スキー」として今日まで継続されている。基礎スキー開始のきっかけは、日中戦争下での厚生省による体力養成に、全日本スキー連盟が呼応した実施ことである。だが、ここでは、既に大衆スキーの統制が行われる以前に、スキーの大衆化が全国的に始まっていたことに注目したい。

それは、戦前のスキーが一部の裕福な学生達によって行われた贅沢なスポーツと言われてきたが、実際には昭和 5 年にシュナイダーによるスキー技術の紹介以降、山スキーと言われたアルペンスキー技術は日中戦争に突入する迄、学生以外の多くの人々に広まりをみせており、従来の研究ではそれらについて触れられていない。

本論では、鉄道によるスキー客輸送の動向に注目して、昭和 5-11 年のスキーが広まることに鉄道が如何に関係していたのか、スキーの盛んな長野県と中程度の福井県での場合を取り上げて考えてみたい。

1. 名古屋管区内の鉄道利用によるスキー客

1.1 スキー客の増加

戦前の鉄道は、仙台、東京、名古屋、大阪などの管区に分かれて全国的に管理が行われていた。昭和 3-5 年はまだスキーが盛んではなく、僅かな大学生や外国人が鉄道を利用して行くスキー場とは、大鱒（青森）、五色沼（福島）、鳴子（宮城）、小千谷（新潟）等に限られていた。

だが、昭和 5 年以降スキーが盛んになっていくと、人々の鉄道利用の範囲は東京、名古屋、大阪管区のスキー場や新たに誕生したスキー場へと広まっていった。名鉄管区内の属する長野県、岐阜県、静岡県、滋賀県におけるスキー場の客数からも増加していることが分かる（表 1）。

表 1. 鉄道スキー割引券利用者数（山崎紫峰）

スキー場	所管	昭和3年	昭和4年	昭和5年	昭和6年	昭和7年	昭和8年	昭和9年	昭和10年	昭和11年
立野ヶ原	名鉄			2448	3495	3259	3398	4693	3472	2730
野沢温泉	名鉄			115	135	304	250	275	641	702
宇奈月	名鉄			2045	1464	1682	1890	2114	5014	4982
白馬	名鉄						150	40	83	614
木曾福島	名鉄				6030	3139	3040	6064	3949	2324
藪原	名鉄					236	2038	2557	4038	3443
霧ヶ峰	名鉄					5574	6466	7388	9629	9335
菅平	名鉄			5	222	224	539	430	745	1196
妙高	名鉄			2610	4828	4672	6654	6980	8816	11622
鹿澤	名鉄						5	63	745	1196
伊吹	名鉄			5465	3975	2947	5293	9332	6977	13316
富士山麓	名鉄				1027	1618	2151	2510	1086	938
志賀高原	名鉄					197	567	754	630	726

1.2 新中間層の出現

スキー客の増加は、社会的に新中間層の増加が基盤にあったと考えられる。昭和 4 年の世界恐慌の影響は絹織物産業にも大打撃を与え、山間部の養蚕業者を疲弊させた。現金収入を絶たれた多くの養蚕農家は、綿工業を初めとする都市部での工場労働者に移行していった。経済界では外国の輸出に対抗するため、三井・三菱・住友・安田と言った財閥による鉄鋼、造船、金融業界における集中・大規模化が図られた。そ

の時期、社会的に半数以上を占めていた農民人口が徐々に減少し、代わりに工場労働者が2割近く増加し、新たな中間層が生まれてきた。

新中間層の人々は、進学による学校の増加に伴う教師、工業・産業化に伴い増えた技術者、大規模化した工事・会社に伴い増加した経営管理・事務職員などであった。彼らは一定の現金収入と週末の余暇時間を得て、スキーを楽しむ者が増えたのである。

2. 名古屋管区での鉄道によるスキー場の宣伝と集客策

2.1 長野県信越線沿線のスキー場

名古屋管区の中でも霧ヶ峰、菅平高原、野沢温泉、志賀などの日本有数のスキー客が利用するスキー場を抱える長野県の信越線沿いで行われたスキー場の宣伝と集客をみてみよう。

昭和4年飯山線の開通により、首都圏と飯山方面のスキー場が繋がった。昭和2年菅平スキー倶楽部が誕生すると、上田温泉電軌はスキー場の開発を始め、昭和5年にシュナイダー旋風に乗じて有名になった菅平スキー場の宣伝を東京などの都市部で展開し、またホテル建設を初めとして都市部からの集客を図った。

昭和4年長野電鉄では、同年のヘルセット来県を機に志賀のスキー場開発を始め、バス路線を広げ、当地に適したツアースキーを盛んにするツアールートやヒュッテを設置し集客を図った。

2.2 福井県鉄道沿線のスキー場

一方で、名古屋管区でも日本有数の大型スキー場を持ち、都市部に集客を図った長野県の場合と違い、中・小型スキー場を持つ福井県での鉄道によるスキー場の宣伝と集客をみてみよう。

昭和5年以前に、大野郡の六呂師と森山にスキー場が開設された。六呂師スキー場は、大正12年より大野町・青年団・京都電灯株式会社が協力して六呂師に開設した福井県最大規模のスキー場。越前電鉄が運賃割引や宣伝を行い、休憩小屋や貸スキー、荷物預かり所を設置した。森山スキー場は、尾崎弥右衛門ら大野町と上庄村が協力して森山に開設した。越前電鉄と三芦電鉄が運賃割引を実施した。

昭和5年に飯降（大野郡）、八杉（今立郡）、高野ヶ原（宮崎村）にスキー場が誕生した。飯降スキー場は、尾崎弥右衛門が飯降に開設した。六呂師に次ぐ広さを持つ八杉スキー場は、南越鉄道会社が地元の青年団と岡本に開設し、八杉スロープ協会がスキー場の管理や運営をおこなった。さらに南越鉄道会社が宣伝を行い、直営の宿泊施設を経営した。高野ヶ原スキー場は、鯖浦電気鉄道株式会社と県議小辻千太郎が宮崎村江波に開設した。鯖浦電鉄は、高野ヶ原スキー倶楽部を設立し、沿線の駅にチラシの掲示や電車賃割引を行った。倶楽部員は、鉄道員、教師、青年団員、農民であった。昭和6年に芦山にスキー場が誕生した。芦原スキー場は、芦原スキー倶楽部が村国山に開設した。福武電鉄と南越鉄道の援助により、スキー場の修理や拡張が行われた。スキー倶楽部の会員は、医師、事務員、教師らであった。昭和9年坂井郡前谷にスキー場が誕生した。前谷スキー場は、地元の青年団と永平寺鉄道が開設した。

3. まとめ

昭和5-11年の長野県の大型と福井県の中・小型スキー場において、大型スキー場には都会から、中・小型スキー場には県内の客が足を運び、共に鉄道が客足の媒体となった。地方スキー倶楽部の会員は、教師、事務職、青年団員が多く見られる傾向があったと言えよ

近代テニスにおけるサーブ技術の変遷史

後藤光将（明治大学）

1. はじめに

1973年に英国のウィングフィールドによって考案された「スファイリステイク、あるいはローンテニス」は、近代テニスの誕生に大きな役割を果たした。そのため、彼は近代テニスの創始者といわれる。初期の近代テニスルールは、コート大きさ、ネットの高さなどが大きく変化したが、それに伴い様々な技術が変化した。本研究は近代テニスのサーブの技術の変遷に焦点を当て、その変化の背景を明らかにすることを目的とする。

2. ネットの高さとの関係

近代テニス（ローンテニス）とそれ以前のテニス（リアルテニス）の大きな違いは、サーバーが優位に立ったという点であったといわれる。『フィールド』誌によれば、第1回ウィンブルドン大会全試合の601ゲーム中、サーバーが取ったゲーム数は376、レシーバーが取ったゲーム数は225で、全体の約63%のゲームをサーバーが取得していた。もっとも、現代においてはサーバーがゲームをキープするのはいわば「常識」だが、サーブ技術はネットの高さの変化とともに向上していったと考えられる。

1877年に開催された第1回ウィンブルドン大会では、参加22選手が全員アンダーハンドのサーブであった。当時はサーブで優位に立つというよりも、サーブの返球からのラリー展開から、戦術的な駆け引きが開始されたと考えられる。1877年当時、ネットの両サイドの高さは約1.52m、中央は約0.99m（現在はそれぞれ約1.06mと約0.91m）であった。この3年前、つまり、ウィングフィールドの頃は、両サイドの高さは同じであったが、センターの高さは1.42mもあり、現実的に直線的な軌道のサーブは打つことが困難であった。

1878年の第2回大会にはオーバーヘッドサーブが登場したが、オーバーヘッドといっても変化球主体で、高速サーブの登場は1881年のレンショー兄弟が出現してからといわれる。ネットの高さも1878年には前年に比べ、両端、中央とも8cmずつ低くなり、1880年には両端がさらに23cm低くなった。このことから、サーブのスピード化の背景の一つとして、ネットの高さの低下が挙げられる。

また、ネットの高さの低下自体には、いくつかの理由が考えられる。まず、ラリーの応酬のための適正な高さが求められたことや、ネットポストが木製から1880年代に入って鋼鉄製になり、ネットをより強く張れるようになった点である。ネットは、1883年に現行の高さに定められ、以降、130年以上変化していない。

3. コートの大きさとの関係

コートの形もサーブの変化に影響を与えた。ウィングフィールドの考えたコートは、長さ18.288m、幅9.144mで、中央は幅8.40mと砂時計型の中央がくびれた砂時計型であった。サービスサイドが固定し、その中央にダイヤ形のマークが入り、サーバーはここからサーブを行った。第1回ウィンブルドン大会では長さ23.77m、幅8.23mと、現代とまったく同じ長方形のコートに変化してい

る。しかし、サービスエリアはネットから 7.924m もあり、現在より 1.5m 以上も長かった。当時はベースラインをまたいでサーブをしなければならず、ボールも現在より軽かったので、サーバーが圧倒的有利ということでサービスエリアの縮小が実施され、1880年には現在の「ネットから 6.4m」と決まった。

一方、1903年には両足ともベースラインの外側に置いてサーブを打つようにルールが変わり、1960年になってサーブのインパクトの瞬間には両足で跳び上がってもよいことになった。1930年代に硬く弾力性に富んだボールも登場しており、ここでサーブ・アンド・ボレーの技術が有効となったと考えられる。

4. コートサーフェスとの関係

テニスはコートサーフェスにより、プレースタイルも変わる。全仏オープンに代表されるヨーロッパのクレイコートでは、ストロークを粘り強く続けるベースラインプレーヤーが有利といわれ、ウィンブルドンのような芝コートではサーブに威力のあるプレーヤーが有利な傾向がある。その中間ともいえる全米オープンのようなハードコートでは、攻守を兼ね備えたオールラウンドなテニスが要求される。現代は、中間の球足のハードコートや、室内カーペットコートでの大会が増えているので、強力なサーブでネットプレーもこなし、さらにレシーブでもスキのないオールラウンドな技術の持つプレーヤーが有利となっている。

5. グリップとの関係

イギリスでは全てのショットをワングリップで打てるように「イングリッシュ・グリップ（いわゆるもっとも薄いグリップ）」で持っていたが、大西洋を渡りアメリカの東海岸では「イースタン・グリップ」、さらに遠方の西海岸では「ウェスタン・グリップ（いわゆるもっとも厚いグリップ）」というように異なるグリップの傾向があった。厚いグリップは、グラウンド・ストロークにおいて、よりスピンをかけた攻撃的なボールを打つことができる。しかし、その反面、フォアハンド、バックハンド、ボレー、サービスなど異なるショットを打つ時には、グリップを持ち替える必要がある。この厚いグリップでのプレースタイルは、現在のラケットよりも約 2 倍の重さの木製ラケットを操る必要があるため、強靱な体力を持った一部のプレーヤーにしか真似のできないものであった。しかしながら、1970年頃から、アルミニウム、グラスファイバーなどの合成樹脂製のラケットが開発され、より軽く、スイートスポットが広く、剛性の高いラケットが出現してきた。そのため、現在では時速 200km を超すサーブも珍しくなくなり、一般プレーヤーでもウェスタン・グリップでフォアハンドストロークを打つことが普通となっている。

6. おわりに

スポーツ史における「技術」は非常にむずかしい対象である。本研究では、近代テニスにおけるサーブ技術の変遷の背景として、ネットの高さ、サービスコートの大きさ、コートサーフェス、ラケット素材の変化などが影響しているという仮説のもと、それらを取り上げたに過ぎない。あくまでも技術変遷の「背景」であって、要素や要因とまではいえないであろう。それらを論じるための方法論を構築することが、今後の課題である。

小谷 究（流通経済大学）

2013（平成25）4月に、一橋大学男子バスケットボール部のOBによって構成される一橋バスケットボールクラブから、日本バスケットボール振興会に東京商科大学（現一橋大学）のOBである故西澤岩松が所蔵していた8ミリフィルムより抄録したという映像を収めたDVDが寄贈された。一橋バスケットボールクラブに確認したところ、DVDに収められた映像の元となる8ミリフィルムの所在は不明になっていた。映像の内容は屋外コートで成人男性によって行われるバスケットボール競技のゲームの様子であった。

西澤は1937（昭和12）年に東京商科大学を卒業したことから、映像のゲームが1930年代中頃のものであると推察される。この時期における日本のバスケットボール競技の様子を収めた映像は管見の限り見当たらないため、映像が1930年代中頃のものであれば、当時のバスケットボール競技を理解するための貴重な史料となり得る。そこで本研究では、まず映像が撮影された場所と時期、映像に収められているゲームを特定したい。

さらに、映像ではドリブルをついている様子が確認できる。これまでのバスケットボール競技の技術史研究では、ドリブル技術について検討した研究が他の技術と比較して多い。用具および施設の側面から昭和初期までの国内バスケットボール競技におけるドリブル技術について考察した谷釜によると、日本において大正末期～昭和初期頃に誕生した国産ボールは、手縫い製法でつくられたために使用中に変形するという欠点を持っており、ドリブル中のイレギュラーバウンドを避けられないものであった。また、競技移入当初、バスケットボール競技は、体育館不足に起因して屋外競技として行われたため、平坦な状態に保たれていない屋外コートの地面の影響を受け、ドリブル時には予想外の方向にボールが弾んだ。このように当時はボールの性能が悪く、さらに平坦でない屋外コートで行われていたため、プレイヤーはボールを視野に入れながら体の正面でつくというドリブルを余儀なくされた。しかし、これらの研究では、ドリブル技術という複雑な動きを把握することが難しい文字史料や写真などを史料として用いている。映像の動画を用いることで、より深く当時のドリブル技術について分析することができるといえよう。

そこで本研究では、映像が撮影された場所と時期、映像に収められているゲームを特定したうえで、映像を元にこの時期のドリブル技術の実際について明らかにすることを目的とした。

本研究における検討の結果は、以下のように整理することができる。

DVDに収められた映像の時間は2分28秒であった。映像は連続したものではなく、60のシーンで構成されており、最初の1秒は山の景色であった。山の景色のシーンより後のシーン2から59はバスケットボール競技のシーンであるが、シーン2から54とシーン55から60は別のゲームであることから、シーン2から54までをゲーム1、シーン55から60までをゲーム2とした。ゲーム1はプレイヤーの身体全体が映されているが、ゲーム2の映像はそのほとんどがプレイヤーの足元しか映されていない。

ゲーム1の映像には東京帝国大学本郷キャンパスに設置された箒排球コートの周りにみられる外階段の踊り場がある建物が見られることから、ゲーム1の映像が撮影された場所

が東京帝国大学本郷キャンパス箒排球コートであることがわかる。また、ゲーム1とゲーム2には、同じ通路とコートを囲む傾斜のある芝で観戦する観客を確認することができることから、ゲーム2が撮影された場所もゲーム1と同じ東京帝国大学本郷キャンパス箒排球コートであることがわかる。

東京帝国大学本郷キャンパス箒排球コートは1934（昭和9）年に設置されたことから映像が1934（昭和9）年以降に撮影されたことがわかる。また、映像のゲーム1ではフリースロー成功後はエンドスローによりゲームを再開しているものの、フィールドゴール成功後はセンタージャンプによりゲームを再開しており、ゲーム1、ゲーム2ともにコートにセカンドサークルが描かれていることから、ゲーム1が1936（昭和11）年10月から1937（昭和12）年8月まで、ゲーム2が1936（昭和11）年10月から1938（昭和13）年8月まで施行されていたルールによって行われていることがわかる。さらに、ゲーム1の映像に映し出された観客の服装はコート等を着用しており、夏の時期ではないことが確認できる。したがって、ゲーム1の映像が撮影された時期を1936（昭和11）年10月から1937（昭和12）年5月までに限定することができる。ゲーム2については、ほとんどが足元の映像になるため、撮影された時期を1936（昭和11）年10月から1938（昭和13）年8月までにしか限定できなかった。

映像のゲーム1、ゲーム2ともに淡色のユニフォームを着用したチームと濃色のユニフォームを着用したチームが対戦するものである。ゲーム1の両ユニフォームは、当時の東京商科大学と慶應義塾大学のユニフォームの特徴と一致することからゲーム1の映像は東京商科大学と慶應義塾大学との対戦であるといえる。東京商科大学と慶應義塾大学は、1936（昭和11）年10月から1937（昭和12）年5月までの期間に東京帝国大学の箒排球コートにおいて開催された第13回関東大学リーグ戦において3度対戦している。これらのことから、ゲーム1の映像は1936（昭和11）年10月10日から11月22日に開催された第13回関東大学リーグ戦において東京帝国大学本郷キャンパスの箒排球コートで行われた東京商科大学と慶應義塾大学の対戦であったといえる。ゲーム2については、ほとんどが足元の映像になるため、撮影されたゲームを特定することができなかった。

映像では目の前に立ちはだかるディフェンスプレーヤーをかわして前進するドライブが2回確認できた。ただし、そのドリブルはレグスルーやバックビハインドなどといった巧みなものではなく、ほぼ両手でフロアにバウンドさせるパワードリブルのようなものであり、1回のバウンド後にはすぐにボールを両手で保持するといったものであった。当時の国産ボールは使用中に変形するという欠点を持っており、ドリブル中のイレギュラーバウンドを避けられないものであったため、プレーヤーはボールを視野に入れながら体の正面でつくというドリブルを余儀なくされたものの、こうした制限のなかでもボールマンは1回のドリブルで目の前のディフェンスプレーヤーを抜き去るドライブを用いていた。このドライブを可能にしたのは、厚みのある板を敷き詰めた板張りコートであった。このように、1933（昭和8）年以降の板張りコートの構造上の精度向上は、ドリブル技術を自らシュートを打ったり、味方にパスをすることが困難な場合のみ用いられる単純な「つなぎ」のプレーから、目の前のディフェンスプレーヤーを抜き去るドライブの場面で用いられる技術へと押し上げる要因となった。

本研究は2019年度体育史学会研究助成の助成を受けたものである。

はじめに

スポーツを実践する局面に着目する意味でのスポーツ歴史学的研究の多くは、ルールとの兼ね合いや用具の変容に着目しながらスポーツ技術・戦術を明るみに出そうとするものであった。その成果は、スポーツ歴史学の全体像を見失ってはならないという指摘を受けつつ、具体的なスポーツの場면을詳らかにすることからスポーツ種目史と関連して蓄積されている。

このような流れを踏まえつつ、スポーツ実践に着目するにあたって本研究では選手が書き残したものをういて「練習」の狙いや方法の変遷を描くことにしたい。これまでのスポーツ実践の歴史を論じる研究の多くは、一方で練習の成果を発揮する試合を取り上げ、他方で指導者側の書き残したものを主要な資料としてきた。しかし、練習は試合に向かうものでありつつも日々のスポーツ実践を考えれば試合はその一局面であるし、指導者の主張は実態を踏まえつつもそれとは位相の異なるスポーツ実践の理想像が記されることが多くなる。そこで、スポーツ実践により接近しようとするならば、実践者側としての選手の書き物を中心的な資料にして練習を辿ることも方法の一つではないだろうか。

このように日々の練習は試合と表裏一体であり、練習の実践者は選手であることを手放さない本研究ではスポーツ実践の場面としての練習を歴史学的に描くことを見据えて、1920～30年代の東京六大学野球を取り上げる。この時代は、『野球界』、『アサヒスポーツ』などのスポーツ専門雑誌やスポーツ関連書籍が刊行されており、これらに東京六大学野球の部員の論考がいくつも掲載されている。これに関連する論考は野球部史にも掲載されている。さらに、1920年代に東京六大学野球の競技水準は守備力をはじめとして飛躍的に向上しており、それは練習のあり様の変化を示唆している。

そこで本研究では、1920～30年代の東京六大学野球における選手の書き物に着目して、練習する選手たちの諸相を浮かび上がらせることを目的とする。

1. 草創期の大学野球部の練習

1902（明治35）年に早大に入学した泉谷祐勝は「組織立つた野球部もなく、各中學校から集った連中が寄合世帯の如く狭い運動場で球投げ球拾ひをやつてゐる有様だった」という。また、早大は「揃つた練習などは一度もやらない。個人々々の力倆は充分あつても、チームとしての實力は疑わしい」という状態であった。慶大の「野球部の第一回卒業生」の渡辺万次郎は「当時の慶応の野球のグラウンドは稲荷山にあって、これも正規のものでなく、細長い形をしたもの」であり、部費が十分ではなかったことから「傷んだボールや他の道具は部員が皆してつくろつたりして使つた」と回顧している。こうした環境にあって、1903（明治36）年度主将の宮原清は「狭い山上校庭で投捕球やゴロの練習をしたに過ぎなかった」という。明大では「いつもは三、四人しかきていない。そのころの柏木球場は草ぼうぼう。ボールが一度飛び込んだらさあ大変。草を分けて探し廻るありさまだった」ようである。立大では「バッティング練習をすると中学校庭があまり狭いため、校舎や講堂の窓ガラスを頻繁に毀す」ありさまであり、練習や試合のたびに「中学部選手を補充」していたのである。

このように、草創期の大学野球部では、グラウンドの狭さや未整備、道具の不足、選手の集まりの悪さなどがあり、選手たちは日々の体系的な練習をするというよりも、居合わせた選手たちで牧歌的な練習をしていたことがうかがえる。

2. 1920～30年代における東京六大学野球の練習

「大正十年代以前以後では野球の時代が確かに違つて居り」、この中でも東京六大学野球は「我が國で行はれる野球の内で、一番技術の點に於て發達した、最高級の試合」と評価されていた。では、この時期、選手たちは練習をどのように捉えていたのだろうか。

慶大の川瀬進は「殊に捕球は練習をすればする程確實になつて行くもの」言い、早大の伊達正男は「バッティングに於ける上達はただ研究と努力と練習を於いて他にはありません」と主張している。捕球にしても、打撃にしても、練習は技術の向上と不可分なものであり、その質と量が重視されている。強豪とみなされていなかった立大の太田清一郎は「どうも毎度 / \ 負けてばかりいてもはじまらない。隙をねらつて勝つてやらう等と思ひ始めまして、練習にも氣勢が違つて来ました」という。リーグ戦として定期的に試合が組まれるようになると、練習は試合との結びつきを強めていくことになる。

そして、練習は試合での役割に基づいて行われるようになる。早大の水原義明は、一番打者は「毎日の練習に於きまして細心の注意を拂ひ、確實なるバッティングを行ふ様になければなりません。毎日、之を意識的に行つて居りますと、之が習慣性となりまして試合に於きまして、之が自然に表はれて来る様になると思ふのであります」と主張している。練習が、試合を見据えつつ、日常化していることがわかる。明大の中村峯雄は「私はカーブやストレートへ投球の練習をする以前から」補助運動やランニングをし、春のトレーニングのための準備として「これを毎日毎日必ず實行いたしました」としている。これは投手という役割に特化して計画的に日々の練習を積み重ねていることを表している。

日々の練習で身についたものは、試合に表れることになる。明大監督の岡田源三郎は1934（昭和9）年のハワイ遠征を振り返り、「勝つた試合はともかく、負けたゲームは凡失がつづいたため、何故そうだったかというのは、向うのグラウンドは、全部ローンで下が堅く、バウンドが高くなるので、それに不慣れなことが原因している」とみている。同じグラウンドで日々の練習を繰り返していると、そこでの感覚が体に染みつき動き方も固定化されていくことになる。つまり、岡田がハワイ遠征で感じた不慣れ感は明大グラウンドで日々練習を積み重ねているからこそ生じたものであると解せよう。

日々の練習の裏打ちされた技術は、選手自らが説明できるものになる。「難球の処理がうまくてイレギュラーバンドを捕る名人」と評される明大の林好雄は、「私の経験から、強い匍球に對して、その球を殺すことを必要と思ふ。球をつかんだら手をひいてから投球する、弱いゴロに向つては手をつき出して球を殺してから、もとのタイプになつて投球する、これが、遊撃としてのゴロを殺して取ることが守備率を高めると思ふ」と主張している。

おわりに

練習は1920～30年代になると内容・環境が整えられ、試合の準備という性格を強めながら日常化した。そこで選手の役割が明確化し、練習の内容は体系化されていった。選手は日々の練習を繰り返して技術を身につけたのである。選手は日々の練習の只中で試行錯誤しているものであり、ここに競技水準が向上する素地の一つがあると考えられる。

* 註・引用および参考文献については当日に配布する資料にて示すこととする。

「体操教範」内容の推移

木下秀明（元日本大学）

陸軍の体操手引書『体操教範』は、フランス式に始まってドイツ式となり、日清戦争後は実用的な野外障害物を加えた。日露戦争後はスウェーデン式に注目し、欧州大戦後は戦闘法の改変に対応するように改正されたという理解は、小野原誠一の戸山学校における講述を増補訂正した『体育と体操の理論』（1923年）を種本としている。

しかし、フランス式からドイツ式への論拠は薄弱であり、高等用兵以外は「明治の陸軍はドイツ式であるよりもフランス式であった」という中村尠（『新説明治陸軍史』1973年）の指摘に、体操も例外ではなかったと考える。

そこで、本発表では、フランス式からドイツ式への論拠の検証を主題に、併せて『体操教範』の推移を考察する。

I. 『体操教範』の更新歴

明治36（1903）年12月21日陸達114号に「体操教範別冊ノ通定メラル」とある。しかし、『体操教範』は、陸軍創設時から以下の通り更新を繰り返してきた。

1. 1874年版『体操教範』（陸軍文庫）

木版和本、図版：体操服外人

最初の『体操教範』が本書で、戸山学校を指導したエッシュマンが1860年版フランス体操教範を「口訳」して長坂昭徳が「筆述」したとある。しかし、固定器械が皆無だから、全訳ではない。

2. 1884年4月版『体操教範：柔軟之部』（陸軍省） 木版和本、図解：体操服外人

本書の他、12月『体操教範：器械之部』『体操教範付図：器械之部』が出版された。

なお、柔軟之部正誤表が「1885年9月2

日」と欄外にある冊子は、通達別紙相当の形式である。

3. 1888年4月版『体操教範：器械之部』（陸軍省） 木版和本、図解：体操服外人

1887年「8月26日：体操教範改正せらる」（『陸軍戸山学校略史』発行者：鶴沢尚信、1969年）とあるから、1887年8月版『体操教範：柔軟之部』は存在した。他に、1888年4月版『体操教範：高尚器械之部』、1888年10月版『体操教範：游泳術付漕艇術之部』が完成順に遅れて発行された。

4. 1889年8月29日版『体操教範：第1部柔軟之部、第2部器械之部』（発行人：小林又七）活版洋装、図解：軍服日本人

本文末尾に1889年5月とある冊子「体操教範改正報告」（発行人小林又七、1889年8月29日）によれば、本書は「準拠すべき適切なる方針を指示」した「体操教範改正の訓令」（1888年12月17日）に基づく5か月間の「考究討議」の成果で、「高尚器械体操」は「教範中より除外」して「体操学校の教科書」とされた。また、「体操とは目的を異にする」「游泳漕艇術」は「付録」とされた。『体操教範附録：游泳術之部、漕艇術之部』（奥付：発行人河村隆実、1890年7月30日）である。

5. 1903年12月21日制定『体操教範』（陸達114号）

6. 1916年2月『体操教範草案^{注)}』（発行人相澤富藏、1916年3月3日）

7. 1918年6月24日『体操教範』（軍令陸17号）

8. 1922年6月22日『体操教範草案』（陸2756号）

9. 1928年12月24日『体操教範』（軍令陸

11号)

II. 基本資料の作成

『体操教範（以下「教範」）の推移は、教範の更新ごとの内容を比較検討しなければ解明できない。そこで、徒手体操と手具体操の操法および器械体操（走跳投を含む）の技法を内容の指標とし、その異同を比較対照できる一覧表を作成した。

操法と技法の名称は、原則目次に拠った。しかし、目次が難解の場合は、本文と図解に基づいて単語または短文を充てた。

また、本文中から目的や体操服装などの操法・技法関連事項を抽出して、その要旨を一覧表末尾に加えた。

なお、紙面の関係上、最初の1874年版と、柔軟之部未見で前後の更新間隔の短い1887年版は、一覧表から除外した。

III. フランス式からドイツ式への検討

ジュクロの戸山学校在任(1874-1877年4月)後の最初の教範は翻訳調の1884年版で、当然フランス式である。したがって、ドイツ式であるか否かの検討対象は1889年教範に限られる。

1889年教範の「2部器械之部」の器械はすべて1884年教範の範囲内であるから、フランス式である。

相違するのは「2章応用演習」の「1教活用器械運動」中に「3障害物散兵通過」と「4障害物競走通過」、「2教活用野外運動」中に「2障害物通過」を加えたことである。これがドイツ式の論拠であろう。

しかし、その本文は、運動開始準備と号令だけで具体的な障碍の記述はない。

一方、1884年版「柔軟之部」には、「障碍物の競走場」について「練兵場の一隅に設け

「少くとも跳下場フットリ襲略障壁各一ヶ所を要す若し競走場の設けなき時は野外」とある。

要するに、1889年教範に関するフランス式

からドイツ式への認識には論拠がないのである。

IV. 一覧表の考察からみた体操教範の推移

1884年教範は、器械の種類も技法も過多のフランスの体操教範を用語に苦勞しながら選別せずに直訳している。当然削減簡易化の方向で加除修正の必要に迫られ、1887年の改正を経て体操の目的を加筆した1889年教範に落ち着く。

以後、教範は、模倣導入の受身の時代から脱皮して、主体的な工夫創案の時代に移る。

1903年教範は、戦場の障碍物を想定した石垣、塀、壕、丸木橋と人梯を器械体操に加え、銃を手具と見立てる携銃体操と手摺、鞭鞭を削減した。日清戦争を経たことで、実戦に有効な体操という視点が根付いたからであろう。

1916年草案に続いて、若干修正された1918年教範が制定された。日露戦争の経験と徒手体操の欠陥を認識した改正である。前者に基づくのは、柵、吊索環（リング）の削減など、後者に基づくのは、準備運動程度だった徒手体操に代えてスウェーデン体操を全面的に採用したことである。連動して木馬は超越台（跳箱）に代った。スウェーデン式呼吸運動（胸式）に腹式呼吸を加えたことは、盲目的フランス式導入時とは違う日本の独自性を示すものである。

また、草案では原則だけだった競技が、教範では多数の運動会的種目を掲載した。

1922年草案が1928年教範となる迄6年を要した。欧州大戦を受け止めるのに時間を要したからで、草案採用の投擲、扛拳は教範に継承されたが、早駈発進の陸上競技化は教範の新規採用である。また、教範付録は草案の運動会的競技を削除し団体球技を採用した。
注)「草案」の主旨は、完成した教範原案を連隊で実験できるようにして、現場の意見を集めることであった。

日本レクリエーション協会「レクリエーション指導者資格検定規程」制定の経緯
岩佐直樹（朝日大学）、來田享子（中京大学）

1. はじめに

近年の日本レクリエーション協会（以下、レク協）の報告書¹⁾によれば、指導者資格の新規取得者数とその更新率は、年々減少している。先行研究^{2),3)}では、この現状の打開には、指導者資格の社会的意義を明確にする必要性が指摘されている。一方、レク協は時代の趨勢に合わせて指導者の役割を変化させてきた⁴⁾。このことは、有資格指導者や制度設計するレク協自身に、資格の社会的意義を見出しにくくさせていると考えられる。

上述の背景には、レク協による指導者資格制度の設置や制度改変の過程における折々の意図が十分に捕捉されていないことが考えられる。現在の資格制度の起点は1951年にレクリエーション指導者資格検定規程（以下、指導者検定規程）が制定されたことであるとされている⁵⁾。しかし、当時、制定に関わりどのような議論がなされたのか、とりわけレク協内部での議論の詳細は、先行研究で詳しく触れられてこなかった。

本発表は、この点に着目し、1951年の指導者検定規程が成立した経緯を明らかにすることを目的とする。検討する主な史料は、国立公文書館および国立国会図書館憲政資料室に所蔵された、財団法人日本厚生協会設立趣意書、財団法人日本厚生運動聯合寄附行為、財団法人日本レクリエーション協会寄附行為、および1949年～1950年のレク協の機関誌、『レクリエーション報告書』（1948年）、『第4回全国レクリエーション大会報告書』（1950年）、『レクリエーション資料』（1950年）である。

2. 結果

(1) 寄附行為上の事業としての「指導者養成」

レク協の母体である「財団法人日本厚生協会」（以下、厚生協会）は、戦後1946年9月1日に「財団法人日本厚生運動聯合（以下、聯合）」に改称するとともに、厚生省と文部省の共管となった⁶⁾。新たな所管庁となった文部省が1947年5月8-9日に開催した全国レクリエーション評議会^{7),8)}では、日本レクリエーション協議会の組織の在り方が議論され⁹⁾、同協議会は、この月に文部省内に設置された¹⁰⁾。同年10月1日には、文部省体育局長らが10月27日から開催する第一回レクリエーション大会の参加案内を各都道府県知事宛に通達した¹¹⁾。

この大会に先立ち、聯合は、1947年10月16日に理事会及び評議会を開催した。この会議では、事業内容の類似性に鑑み、「日本レクリエーション協議会と合体して」¹²⁾、10月27日以降、日本レクリエーション協会を新たに組織することが決定した¹³⁾。翌1948年3月9日にレク協は、文部省と厚生省が共管する財団法人としての承認を受けた¹⁴⁾。

これら一連の動向において、組織の寄附行為が修正された。ただしこの修正は、「便宜上日本厚生運動連合の寄附行為の変更手続き」¹⁵⁾として進められた。事業としての指導者養成は、厚生協会¹⁶⁾及び聯合の寄附行為¹⁷⁾には記載されておらず、レク協の寄附行為¹⁸⁾のみに記載されていた。従って、レクリエーション指導者の養成は、レクリエーションの全国組織の創設を模索する中で、新たに担うべき事業として位置づけられたと考えられる。

(2) 資格制度の前提としての「適任証（終了証）」の授与

1948年3月に財団法人の承認を受けるまでのレク協は、東京在住の理事で構成された在京理事会によって運営されていた¹⁹⁾。1947年12月の在京理事会では、指導者講習会を開催することが提案された²⁰⁾。年が明けた翌月の在京理事会では、単なる講習会の開催だけでなく、指導者養成計画を立案するという発展的な提案がなされた。これを提案したのは、講習会の企画担当を担った「指導部（事業部）」の柳田亨理事であった²¹⁾。以降、計画に関する具体的な議論の記録はみられず、1949年4月25日付の「廿四年度事業計画」には、

指導者の養成は講習会を通じて実施する方針が記された²²⁾。

同年5月のレク協全国理事会において、指導者講習会は文部省及びレク協の共催とし、「講習会を終了し、指導者として適切と思われるものには適任證を授与する」²³⁾ことが決定した。ただし実際に発行されたのは通し番号が付された「終了證」であった²⁴⁾。

(3) 関東ブロック協議会における「資格検定」の先行

1949年8月13-14日に開催されたレク協第8回関東ブロック協議会では、終了証を授与する仕組みが「資格検定」と称され、議論が進められた²⁵⁾。同ブロックの議長は、レク協専務理事の白山源三郎であった。この後、10月1日付で印刷されたレク協機関誌には「レクリエーション指導者資格検定規程（草案）（以下、白山草案）」が掲載された²⁶⁾。また、直後の10月13-14日の関東ブロック協議会では、白山が資格検定に関する説明を行い、参加者との意見交換がなされた²⁷⁾。ここでの議論の詳細を示した史料は残されていなかったが、翌々週に開催された第3回レクリエーション大会参加者への配付資料²⁸⁾には、白山草案の一部に関する白山自身の解説が記されていた。

(4) 資格制度の完成

資格制度がレク協の意思決定機関において議論された記録は、年が明けた1950年1月26日の第4回常任理事会の議事録に初見される²⁹⁾。レク協機関誌等に転載された各種議事録^{30),31)}からは、3月から7月にかけて、複数回の全国理事会や全国幹事会で「指導員検定」制度に関する継続的な審議が行われたことが見受けられるが、大きな進展はなかった。

同年7月26日の日米レクリエーション協議会では、アメリカ側から日本における指導者養成の必要性が指摘された³²⁾。この指摘をきっかけに、翌8月19日の常務理事会では前年の白山草案の代替案が提示された³³⁾。代替案は9月6日の常務理事会での審議を経て³⁴⁾、9月26日の全国理事会においても審議された³⁵⁾。代替案と白山草案の最も大きな違いは、資格の種類を2つに増やした点であったが、いずれの資格取得に対しても講習会への参加を義務づけていた。10月2日に開催された常務理事会では、「指導員検定規程」を評議員会に上梓することが決定し³⁶⁾、1951年に指導者検定規程が制定された。

3. まとめ

戦後、聯合から組織改変されたレク協では、設立時に指導者養成を新たな事業として寄附行為上に位置づけ、「指導部（事業部）」の柳田亨により、計画の策定が発案されていた。しかし、制度化に関する中央の意思決定機関における議論は円滑には進まず、①白山源三郎による草案作成と関東ブロック協議会における働きかけ、②アメリカ側からの指摘という2つの動きに押される形で進んだことが明らかになった。本抄録の1)~36)の典拠文献は、発表当日に示す。

研究目的、先行研究

戦前の日本におけるボーイスカウト運動である「少年団運動」には、「弥栄節」の称揚や皇室崇拝を核とした「国家主義」ないしは「軍事主義」の連座があった。にもかかわらず、第一次世界大戦後の英国ボーイスカウト運動においては、「国際主義への転換」と呼ばれる国家間の協調を重視する路線への変更がみられ、この影響を受けた国際的な青少年の友好、「良き市民」の育成による平和秩序の維持という理想も掲げられた。上平らは、そこには異質なイデオロギーの二重構造が存在したと述べている¹。

この「国家主義」と「国際主義」の並列は、少年団研究において常に問題とされてきた。例えば、田中治彦は「ボーイスカウト運動が軍事教育を目指していたのか、それとも市民性の教育（公民教育）を目指していたのか」²はボーイスカウト、少年団研究を行う上で主要な問題関心であると述べた。田中はどちらか一方にのみ偏った結論を出すことは出来ないとし、「国家主義」か「国際主義」かという境界はそれを受容した団体や国家、時期によって異なるとした³。したがって、これまでなされてきた少年団運動研究は、「国家主義ないしは軍事教育」か「国際主義ないしは市民教育」の両側面を否定せず、両軸の間のどこに少年団運動を置くかという位相分析をおこなってきたと言えよう。

加えて、近年この「国家主義」と「国際主義」の関係性を捉える上で、第一次世界大戦後から第二次大戦期のボーイスカウト研究を見直す研究も進んでいる⁴。とりわけ、それらは、第一次世界大戦後のボーイスカウト運動における「国際主義への転換」という物語を見直す上で生じた。すなわち、「国家主義」と「国際主義」に対立軸を見出すのではなく、むしろ同一の地平上で両者を論じ、その間に分断よりも、方向としての連続性を見出そうとするものである。こうした第一次世界大戦前後のボーイスカウト運動に関する先行研究は、いずれも個人や各団体といった多様なアクターが如何にボーイスカウト教育やその思想を受容し、自らのものとして翻訳し改変したのかに着目している。すなわち、スカウト運動思想の伝播過程にはある種の共通性があることを認めつつも、いかにしてその中で差異が生まれるのか、そしてその差異がどのようにスカウト運動全体に影響を及ぼしたのかについて論じている。

本発表はこうした先行研究を受け、少年団運動が直面した「国際主義と国家主義」の並立はどのように説明されるべきかという問題を再考する。その際に、ボーイスカウト運動の「国際主義への転換」が少年団運動にどのように紹介され、そしてどのように変容したのか、少年団日本連盟屈指のボーイスカウト通として知られた奥寺龍溪（1877～1936）の著作を元に論じていく。

研究方法

奥寺は、少年団における「誓い」と「掟」の作成や *Scouting for Boys* の翻訳、カブスカウト、ローバースカウトの紹介などを行い、少年団日本連盟に英国ボーイスカウト運動の教育方法や思想を導入する上で重要な役割を果たした人物である。彼は少年団運動を通して、普通選挙の実現が目指されていた日本社会に英米式の市民教育を普及し、適正

な立憲政治が行われることを理想としていた。しかも、奥寺は、英国パブリック・スクールにおいて崇拜されたスポーツ教育思想、アスレティズムに注目し、この教えを必要な市民教育として注目していた。すなわち、彼は、アスレティズムを国民全体に普及する装置としてボーイスカウト運動に着目し、スカウト教育に日本式の武士道理念を投影した。より具体的には、天皇と皇民という主従関係の繋がりを接ぎ木し、第一次世界大戦によって露呈した西洋近代主義の超克を意図した。

幾つかの先行研究は、奥寺が、女子補導団や海洋少年団といった少年団に隣接する社会教育運動に少年団の理念を伝える講師、顧問として活躍していたことや⁵⁶、日本とシャム（タイ）のボーイスカウトの交流に際して、事務方として活躍していたこと⁷を明らかにしている。また、上平は奥寺を中庸論者、すなわち「国際平和主義と国防国家主義」の均衡論者であるとし、彼のボーイスカウト論は満州事変以降の少年団運動の「国粹主義化」の中で時代錯誤のものとなっていたと述べている⁸。

しかしながら、晩年の奥寺の論考には、少年団運動の「国粹主義化」路線に自らの「ボーイスカウト」論を適応させようとした痕跡がみられる。このことは、単に「国粹主義」化の中に彼の「国際主義」が取り込まれたと言う事を意味しない。そこには、翼賛体制へ完全に取り込まれることに抵抗しつつも、子どもたちの自発的な参加による少年団運動の有用性を示そうとした、奥寺の迷いや葛藤が見え隠れする。

そこで、本発表では、奥寺の残した言を詳細に辿り、分析対象とする。具体的には、第一回日本ジャンボリー開催を記念して発行された、奥寺による『ボーイスカウトの精神』（1922年）と『少年団研究』11巻第一号（1934年、1月）から13巻第五号（1936年、5月）に渡って長期連載された「訓練の組立」「訓練の仕組」について論じる。これらの分析を通して、奥寺がボーイスカウト運動にみられた「国際主義」をどのように理解したのか、また、15年戦争に突入するなかで遭遇した国内世論の変化に、彼が自らのボーイスカウト論をどのように適合させたのかについて明らかにしていく。

以上を通して、奥寺が理想とした各国スカウト達の連帯による世界平和という、ボーイスカウト運動の理想の到達点とその限界について述べ、全体のまとめとしたい。

¹ 上平泰博、田中治彦、中島純『少年団の歴史—戦前のボーイスカウト・学校少年団—』萌文社、1996年、194頁。

² 上平、田中、中島、前掲書、15頁。

³ 同上、16頁。

⁴ Boehmer, Elleke, “The Text in the World, the World through the Text: Robert Baden Powell’s Scouting for Boys”, Edited by Antoinette Burton, Isabel Hofmeyr, *Ten Books That Shaped The British Empire -Creating an Imperial Commons*, Duke University Press, 2014.

Johnston, Scott, “Courting public favour: the Boy Scout movement and the accident of internationalism, 1907-29” *Historical Research*, Volume 88, Issue 241(2014): 508-529.など。

⁵ 矢口徹也『女子補導団—日本のガールスカウト前史』成文堂、2008年、159頁。

⁶ 圓入智仁『海洋少年団の組織と活動—戦前の社会教育実践史—』九州大学出版会、2011年、126頁。

⁷ 圓入智仁「1935年にシャムが日本に象を贈った経緯と目的 —ボーイスカウトにおける国際交流の一事例—」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』46号、59頁—69頁、2014年、63頁。

⁸ 上平、田中、中島、前掲書、194頁。

2020 年度 体育史学会 第 9 回大会

プログラム・発表抄録集

2020 年 8 月 21 日 印刷

2020 年 8 月 21 日 発行

発行者 大久保 英哲

発行所 体育史学会

〒305-8574

茨城県つくば市天王台 1-1-1 筑波大学体育系

大熊燦雨研究室

Tel : 029-853-6352

taiikushi_office@taiikushi.org

印刷所 ホクエツ株式会社

〒135-0033 江東区深川 2-26-7 北越ビル

Tel : 03 (5245) 8821

